



寄稿 吉田行男氏
「和と雅のわが絹甚」

— 飯能ひな飾り展 — 店蔵絹甚

気取らなく、粹。

飯能情緒

Vol.02

January 2013

文化のにおいがする

和と雅のわが絹甚

絹甚運営委員会委員長

吉田行男氏

「そつだ 京都、行こう。」というキャッチコピー。日本人なら誰しも、それぞれの京の風情を好感を持って思い浮かべるだろう。千年を超える歴史が民族の血の中に根付いていて無意識に心を揺さぶられるのだと思う。

「絹甚」も似ている。日本の近代化を担った絹、日本人の誰しもが絹に関わった時代があったの



店蔵絹甚

■概要

黒漆喰の壁、下屋の屋根にうだつ、屋根の棟には大きな棟飾りがあがるなど、贅の限りを尽くした建物です。店蔵、居宅、土蔵の3棟があり、居宅と土蔵の間には中庭があります。

敷地面積：156.82㎡

店蔵：土蔵造二階建 延床面積 73.55㎡

居宅：木造二階建 延床面積 58.29㎡

土蔵：土蔵造二階建 延床面積 41.17㎡

■開館日

毎週水曜日～日曜日 10:00～16:00

●各日とも、文化財説明のためのガイドが1名常駐しております。

●専用駐車場駐輪場はございません。

お越しの際は電車／徒歩をお願いいたします。

■所在地

埼玉県飯能市本町2-2



は、やはり民族の血の中に根付いている。絹甚は絹産業全盛時の象徴として、人々に色々々な想いを抱かせるのだと思う。

絹甚が残されると聞いて、私も素直に嬉しかった。修復され文化財として公開され、さらにより良い活用へと商店街連盟から大通り商店街の民間運営に託された訳である。

民間ならではの運営をしたい。私は東京都町田市の旧白州邸「武相荘」が良い手本だと思っている。公と民のコラボレーション。収支も良くして商店街へも貢献し、そして地元はもとより、日本国中の大勢の人々に絹甚が愛されるよう仲間と共に「和と雅の絹甚活用」を実践したいと思うのである。

飯能情緒

飯能文化の良さをワンテーマで伝える冊子。サポーターからの資金提供により取材・制作を行っています。ご意見・ご感想または制作依頼は、下記までご連絡ください。

■発行者

企画・執筆 石井 茂 Tel: 042-973-4004 mail@ishii-design.info
グラフィックデザイン 黒田 靖 Tel: 042-973-0272 iy9y-krd@asahi-net.or.jp

■協力

飯能ひな飾り展実行委員会、絹甚運営委員会、森と街をむすぶ「木馬をつくる会」

取材・制作にあたりまして、多くの方にご協力いただきました。
この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

飯能ひな飾り展

易々と新しいものに飛びつかない。

無闇に事を企てたりはしない。

でも、一旦やると決まったら、

損得勘定抜きで、

言われなくたって動いてしまう。

気取らなく、粹… なんだよね。

この町の人たちは。



飯能大通り商店街



飯能中央通り商店街



飯能銀座商店街

スローでマイペースな町。

飯能市内の商店街を歩いて気付くのは、都会などにある商店街に連なりがちなチェーン店が見当たらないことだ。どの店も、代々続いている地元の店舗であり、それぞれ個性的な色合いを放っている。平日の昼間であるためか、人通りは疎らであるものの、シャッターが閉まっているような店はなく、活き活きとした商いの日常風景がそこにはある。

商店、この個性も際立つが、大きく3エリアに分類される商店街も、それぞれ特徴的。飯能駅からもっとも近い「飯能銀座商店街」は、二部の路面全体にレンガ調のタイルが敷かれ、いかにも商店街という雰囲気。通り側に立ちあげた壁面に洋館風などのデザインを自由に施してある、看板建築が目につく。勢いに溢れていた昭和の頃を思い起こされる街並みだ。東飯能駅の駅前ロータリーから西方向へと延びているのは、「飯能中央通り商店街」。この道筋をうたう職人気質のお店やプロ用達の商店に加えて、新しいセンスを携えた専門

ショップが入り混じって並び、活力のある通りとなっている。

駅から離れた市街地の西側に位置する「飯能大通り商店街」は、山と町が交わるこの地で自然発生的な市が立ち並んだ江戸時代からの通り。明治の初め頃には商店街が形成され、創業100年以上という老舗が多い。蔵造りの喫茶店や店舗、ギャラリーなどが点在し、その名残が濃厚。以前、役場があったのも、現在は中央公民館となっている辺り。当事者は好まな

い表現のようであるが、飯能の旧市街地といえはここなのである。

この町がおもしろいのは、商店街が連なる市街地のすぐ隣に風光明媚な河原があることだ。ここからは奥武蔵の玄関口と呼ぶに相応しい風景がひろがり、人間川沿いに遡りながら山々が深くなる様子を一望できる。人通りの多い飯能駅からこの飯能河原まで歩いてわずか15分弱ほどでこうした町の様子や市街地の規模から、スローにマイペースに発展を遂げてきた飯能らしさが浮かび上がる。

みんなが参加できる。

かつて飯能は、その地理的条件から木材や絹織物で大いに栄えた町。



飯能と雛飾りの
すてきな関係が
はじまった。

そのため、商店や飲食店が数多くあり、周辺から人が集まる繁華街を形成していた。今

もなお、その痕跡があちこちに見られ、この町は不思議な魅力を漂わせているように思う。こうした財産を現在のまちづくりに活かそうと、これまでに様々な取り組みが行われてきた。「飯能ひな飾り展」も、そのうちのひとつである。

飯能の魅力を一と言で表すのは、本当にむずかしい。親しみやすい山や川の自然にも、庶民的な雰囲気のある町にも、良さがあふれている。それをうまくつなげようと動き出したのが、「飯能ひな飾り展」であった。

出発点は、ある商店の女将さんのひらめきから。創業130年を迎えようというその酒屋には古い蔵があり、何かの片付けの際に出てきた古い雛人形に見惚れ、「家々にしまっているお雛様をみんなで見せよう」と思いついた。展示すれば、地域の活性化につながる！

「家々にしまっているお雛様をみんなで見せよう」と思いついた。展示すれば、地域の活性化につながる！

「家々にしまっているお雛様をみんなで見せよう」と思いついた。展示すれば、地域の活性化につながる！

「木馬」から「ひな」へ。

その後の展開の原動力となったのが、イベント共催者として名を連ねている森と街をむすぶ「木馬をつくる会」であった。同会は、西川林業で栄えていたこの地にあって、間伐材を利用してつくった木馬を商店街などに展示。市民を巻き込みながら、町と山の両面からの活性化に取り組んでいる。飯能商工会議所による世界の



巨大木馬づくりギネス登録も、同会がサポートした。

木馬に次いで注目したのが、ひな飾りであった。きっかけは先に紹介した通りであるが、大切に保管されているひな飾りを二斉にお披露目することで、地域ににぎわいをもたらそうと考えた。

スタート時は、仲間数名の手づくりイベント(当時の名称は「ひな飾りお宝展in飯能」)であったが、狙いを説明するとおもしろさがつくれる町の人は想像していた以上に多かった。市の地域活性化支援事業に応募し、活動資金も何とか得られた。1年目よりも2年目、3年目と参加会場(店舗民家は増えるばかりで、何年目からは市街地だけでなく、山あい地域の方々も協力してくれるようになった。子どもの成長や健康を願う雛飾りは、多くの家庭で揃えられるもので、その家の歴史が詰まっているといつていい品物。使わなくなった後も処分せず保管してあることがあり、それをお披露目することは誇らしくもあるのである。

思い思いに飾る。

はじめのうちは、「うちにも古い雛人形があるから、飾ってみようか」というような動機だったのかもしれない。しかし、実際にやってみると、雛人形の展示は店舗ディスプレイに二役買ったのである。どの店も、季節が変われば多少の模様替えが欠かせないが、春先の雛飾りはそれに打ってつけたと言える。しかも、やる毎に評判が高まり、見に来てくれる人が増える一方。そうなれば、展示する側も自ずと力も入るし、工夫せずにはいられなくなるのが人情というものである。

飯能の雛飾りイベントが楽しいのは、形式張っていないところであらう。どう飾ろうが、それぞれの参加者の自由なのだ。商店であれば、その店の商売や店舗イメージに合わせた飾り付けをすればいいのである。となれば、「雛人形を活かすには、どう飾り付ければ一番うまいのか」と、いろんなアイデアが生まれ、菓子屋は菓子屋の、魚屋は魚屋の、服屋は服屋のディスプレイをはじめまる。どの店も、はじめからそこに収



イベントのシンボル-雛段絵図。

「飯能ひな飾り展」のポスターやパンフレットに使用されている絵柄は、雛段絵図と呼ばれるものだ。豪華な衣装を着た雛人形が高嶺の花だった庶民が、雛人形に見立てて床の間に飾ったという。江戸時代以来、有名無名な画家が描いており、後には大量印刷された。

イベント時に飯能商工会議所や店蔵絹甚に掲げられる一品も、この雛段絵図である。しかも、紙などに描かれた絵ではなく織物で作られている大変貴重なもの。当地で織の技を唯一継承している「株式会社マルナカ」の粋な計らいによって製作・寄贈された。精巧で美しい織物は、まさに工芸品である。

まっていたかのように、見事に飾り付けてあるのに感心してしまう。考えてみれば、それもそのはずで、皆さん店舗の飾りつけに関してはプロなのである。

ここを訪れるお客様からしてみると、飯能の地元の人しか知らないようなあの店を知っていることが楽しいのだ。ひな飾りの話をきっかけに、モノの売り買いだけではない人と人とのつながりができ、行きつけの宿みたいな店になる。

最近では、市街地とその周辺だけでなく南高麗、吾野、原市場、名栗と、飯能全域が展示会場となる盛り上がりを見せている。飯能市内には歴史と風土に育まれた古民家が点在し、これらの場所での飾り付けは商店などとは違った趣がある。地域で、家々で、それぞれの個性的な展示風景があり、どこをまわっても飽きることがない。

つくる楽しみ。

「飯能ひな飾り展」には、華を添えている動きがある。それは、女性たちによるつ



商店街を中心にスタートしたイベントが山あい地域へとひろがっていった。

若いチカラへつなげ。

飯能高校

選択科目の「服飾手芸」で、つるし雛作りに挑戦している。担当教諭が「飯能布塾」のつるし雛に出会い、「地域と関わり合いながら作品作りをしたい」と考えたのだ。同科目を選択しているからといって、全員手芸が得意とは限らない。それでも、町の人たちの盛り上がりを感じ、興味を持つ生徒もいるようだ。黒メインでカラーコーディネートした雛飾りなど、若い感性でないと思付かないような作品が目につく。

活気ある町には、若いチカラが欠かせない。

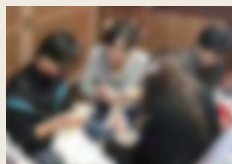


創立当初は女学校。裁縫の授業が毎日二時間あったという。

駿河台大学

ボランティア活動で「絹甚」でのつるし雛作りを手伝っている。参加を希望するのは、主に留学生たちだ。彼女らは1年の日本滞在期間のなかで様々な経験をするが、この活動は人気が高い。先輩による活動風景の写真を見て、「楽しそう」と思うらしい。彼女らと書いたが、男子学生の参加もある。

中国から来ている今年の学生は特に熱心で、4年間続いている同活動の中で、オリジナル作品に初めて挑戦することになった。文化が息づいているものは、外国の人が見ても良さが分かるに違いない。



「普段から裁縫をしています」という女の子もいて、期待大。

存分に力を発揮してもらい、この流れを世界へとひろげてほしい。



商店街手仕事お母さん

ろう。「この年齢になって針仕事……」と言いつつ、若い頃、若いの頃の経験を活かして雛飾り作りをチャレンジする「商店街手仕事

お母さん」が結成されたのである。この動きには、プラスの面があった。飯能の商店街は、3つのエリアに大きく分かれているのだが、同グループは横断的に集まることができたのである。同じ商店街では顔なじみであっても、商店街をまたぐとはじめまして」という人が意外にも多かった。みんなこの町に長く住んでいる人たちなのに、これまで知りあう機会に恵まれなかったようなのだ。町ぐるみで興じる遊びが、新たなネットワークを創り出した

のである。課題もなくはない。個々のお店で見ると、業態によって経済的な恩恵を被りやすいお店と、そうでもないお店がある。確かに、そこは難しい問題であるには違いないが、商店街のあるお母さんが言った「商売を超えたところまでつながっているから、うまくいっている」との言葉が解決の方向を示しているように思う。一針一針でいねいに縫い合わせてさえいけば、ずっとこれからのこの町がほころぶことはないだろう。

両脇に配される艶やかなつるし雛を見て、飾つてみたくなるのが女心というものである。



飯能布塾



るし雛作りである。つるし雛は、雛段を引き立てるためにつるされた手づくりの雛飾り。庶民にとっては、雛段の代用品だった。伊豆稲取、福岡柳川、山形酒田ではそれぞれに独自の由緒があり、現在もそれにちなんだイベントが活発に行われている。

ここ飯能においても、そのつるし雛作りに取り組んだのだ。こちらの動光源となつていのが、ボランティアグループ「飯能布塾」である。実は、この動きには幸運な偶然が重なった。グループが活動の場とする「店蔵絹甚」は、明治中期に建造されたものであるが、同イベントが企画されようとしていたのと同じくして保存活用への動きが活発化し、市は文化財に指定。その活用方法の一つとして、同イベントとの関わりを模索する。その後、「絹甚運営委員

会」の企画事業として、同グループをスタートさせたのである。加えてラッキーだったのは、つるし雛を作る材料を確保できたことだ。グループのまとめ役になっている元学校教諭の知人が大量の古絹を提供してくれることになった。提供者は「そのような形で生まれ変わるなら」という気持ちから、代々受け継がれた大切な着物をほどこしてくれることを約束してくれたのである。この2つの偶然が、今もグループの活動に創作意欲を与えているのは間違いない。由緒正しき「絹甚」を活動の場とすることは張り合いが違うだろうし、古式の染料で色付けられた正絹古布を材料とできる楽しみも果てしなく大きい。

小さな一針が、町をつなぐ。

つるし雛づくりには、もう一つの活動グループがある。それは商店街のお母さん方によるもの。店舗を飾り付けるのに古い雛人形だけでは、もの足らなくなつてしまつたのである。もともとつるし雛は、雛段を引き立てるためにつるされたもの。雛段の

存在感がある。

ここで打合せをさせていただく機会があった。夜、8時過ぎに集合したので、前の通りの車が少なくなっていた。ガラガラと格子戸を開け、土間から見世と呼ばれる場所を通り抜け、奥の座敷まで行く。間口は三間程と狭い。薄暗いため、外からだといく中でも内の様子は見にくかったはずであるが、内側から外を眺めると思いのほか開放的で、時折通る車や人影を見渡すことができた。

この感覚が新鮮だった。堅固な蔵の中にいる安心感に加え、黒光りする柱や梁、土壁の心地良さもあるに違いないが、通りと店内の関係性や空間のサイズが人間にとってちょうど良く、ここに留まることが快適になるように設えてあるのである。

店蔵絹甚



「店蔵絹甚」の歴史。

「店蔵絹甚」(以下絹甚)がある飯能大通り商店街は、古くから「縄市」と呼ばれた六斎市が開かれていた。明治初頭になると、常設店舗が軒を連ねるようになり、現在の街並みの原型が形づくられる。「絹甚」が建てられたのは、明治37年(1904年)。火災への備えという目的もあったが、当時流行っていた江戸の風情を感じさせる土蔵造りを採り入れたのである。

「絹甚」は篠原甚蔵、長三親子によって建てられたもので、「絹甚」という名称の由来もここから来ている。篠原家は、江戸時代から当地にて商いを営み、明治期になると、絹関連の品物を取り扱うようになった。商品構成は幅広く、絹織物や大物(綿や麻の織物)の小売りをしながら、周辺の関連業者向けに生糸、繭、蚕種(蚕の卵)などの売り買いを行っていた。

町のシンボルに。

明治42年、「絹甚」は人の手に渡っている。その後、甚蔵の娘で川越の小池家に嫁いだ小池奈賀が買い戻す。戦後は、奈賀の娘、小池トクが地元の教員をしていたため、昭和40年頃まで居住。トクの死後はトクの妹小池ヨシが相続するが、ヨシの死去にあたり直系相続不在となった。そして、平成16年、相続財産管理人を経て、取得を希望していた飯能市に修理費用と併せて寄贈されることとなったのである。

平成19年、「絹甚」は飯能市の文化財に指定された。以下はその指定文書である。

指定文化財 店蔵絹甚

飯能市指定第六十号 飯能市有形文化財(建造物)に指定された。保存理由は次の通り。

明治時代の商家として当時の姿をよく残す建物であり、当市



明治40年頃の大通りと絹甚
『ふるさとの思い出 写真集明治大正昭和 飯能』より転載

り買いを行っていた。

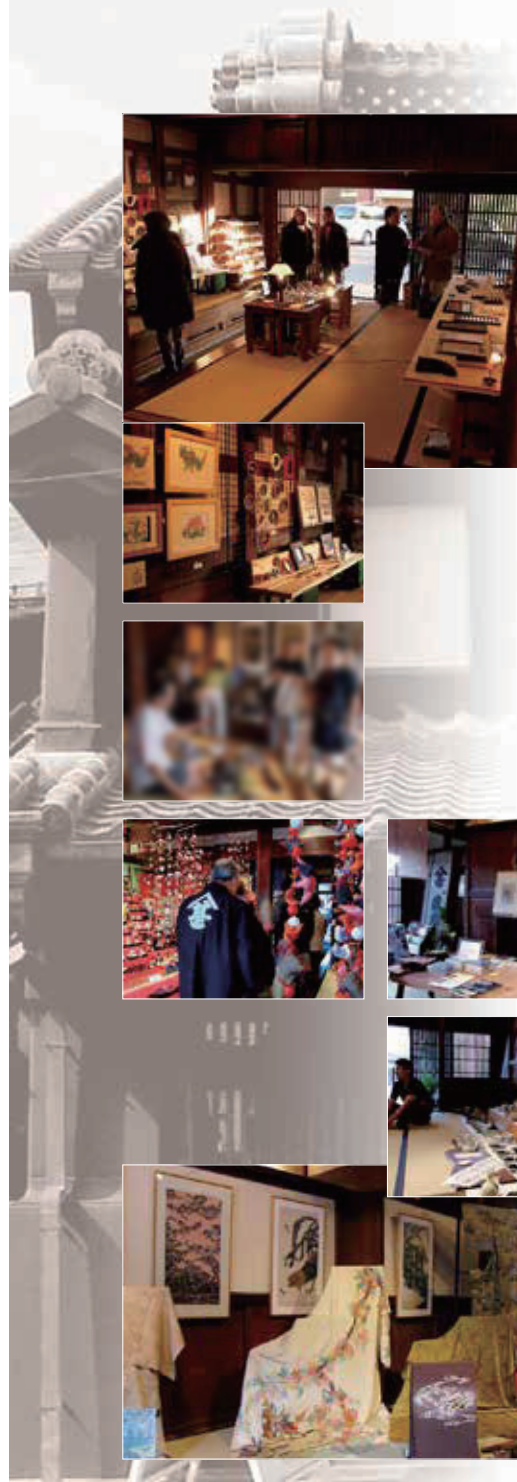
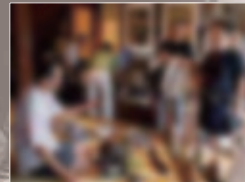
の近代化を支えた絹織物に関連する建物として貴重である。店蔵絹甚が所在する地域は近世から市として栄えた地域であり、店蔵絹甚は市場町の明治時代における土地利用の状況を残す建物群として貴重である。

保存と活用にあたっては、「絹甚保存活用検討委員会」「修理委員会」が設置され、市民や地域を交えて検討されることとなった。その前提として考えられたのが、町のシンボルとして多くの市民に愛される建物としていくことであった。

幸い「絹甚」は大きな改修の跡もなく、おおよそ当初の状態が良好に保たれていた。関係者による議論が繰り返され、町のシンボルにするのだから、活用ありきの改修に重きを置くのではな

く、歴史的価値を踏まえた保存を行うべきとの結論に達する。もちろん、それは活用を疎かにするということではない。上記の文化財指定文書にあるような飯能の歴史に根ざした魅力的で有益な活用をめざそうとするものであった。

現在、「絹甚」の運営は、市民主体による「絹甚運営委員会」に任されている。開館時にはガイド1名が常駐し、「絹甚」の由来や規模、構造などの説明を行っている。その他の活用実績は左記の3つにまとめられる



1. ギャラリー

絵画、イラスト、書、オブジェ、クラフト、骨董などのギャラリーとして活用されています。地域に根ざした作品展示が多いのが特徴。飯能市内外の方から「ここでの展示は心地よく、作品に付加価値を与えてくれる」と、評価されています。

2. イベント

「飯能ひな飾り展」の展示会場や、「飯能まつり」の会所として活用されています。どちらも飯能らしき満載のイベントです。その他にも、寄席や演奏会、茶会などが開かれています。

3. 飯能布塾（絹甚運営委員会企画事業）

つるし雛を制作するボランティアグループ。彼女らが手づくりする布小物は、艶やかでかわいらしく、多くのファンがいます。当所にて毎週水・木曜日に活動しており、春先に実施される「飯能ひな飾り展」で作品が展示されます。

出展者の感想

● 作品が映える

少し歩けば川遊びや山歩きができる飯能のこの場所に在ることに意味があると思う。そもそも店蔵は、商品を展示販売するために設計されているわけだし、重みがありながら洗練された空間は創作作品との相性が良い。

何とか残したい。

「絹甚」は、民間相続でなかったことが幸せだったという人がいる。民間相続されていれば、日常的に使用できるよう改修が施されるか、場合によっては解体されてしまうこともある。そうされなかったため、今あるような良好な状態を留めているという考え方である。効率重視の現代の生活スタイルと照らし合わせると、重厚な土蔵での暮らしは不自由を余儀なくされることが多いであろうし、修理費用は一般住宅に比べて相当高額になる。その保存について、歴史的価値がある、風情がある、観光資源になるという理由により、個人の管理に委ねられるとなれば、それはそれで大変なことだ。

大切なのは、当の建築物にそれを補う以上の価値や可能性を見いだせるかである。苦労はするけれど、深い思い入れがあるので何とか残していきたい。そうした思いをできるだけ多くの人で共有し、課題については解決していく姿勢が問われている。飯能市内



には「絹甚」の他にも、歴史的価値がありそうな建築物が多数ある。町の景観や文化のためにどれだけコストをかけられるかは、市民みんなで考えるべきテーマなのだろうと思う。